

<論 説>

1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態(2)

特にパリのドイツ人に関して 上※

的 場 昭 弘

目 次

(上)

はじめに

(1) パリのドイツ人

a) 外国人とパリ

b) 他の国のドイツ人コロニー

c) パリのドイツ人

(下) (以下次号)

(2) パリのドイツ人人口

a) ドイツ人人口に関する諸説の検討

b) ドイツ人人口の検討

(3) パリのドイツ人の職業、居住分布

小 括

はじめに

パリに対する憧れは現代の我々にとっても大変なものであるが、当時のドイツ人にとっても相当なものであった。ナポレオンを打ち負かしたドイツ人の一人ファルンハーゲン・フォン・エンゼ (Varnhagen von Ense, 1785-1858) がパリを見て、極度のコンプレックスに陥ったのは、それを象徴している [B, 64, S. 59]。

※ 本稿は「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態(1) 特に東フランスに関して」(『東京造形大学雑誌』6A, 1990年)の続編である。したがって問題の所在、研究史、史料の状況、フランス全体についてのドイツ人人口等については、前稿を参照していただきたい。また登場人物の原語表記、生没年については前稿と重複するものは省略した。

ルーゲは、パリに向かう時、興奮極まってこう言っている。「フランスへの道、それは自由への敷居である。我々の夢の実現である。我々の旅の最後にはパリの大きな谷、新しいヨーロッパの発祥地がある。そしてそこでは世界史が沸騰し、あらたに世界史が湧き出ている」[B, 77, S. 4]。そして彼は「おのぼりさん」よろしくモンマルトルの丘に登り、パリを一望したため息をつく [B, 77, S. 45f]。ルーゲよりも少し前に来たベルンシュタイン (Börnstein) は「パリは、長い間到達しがたいように思われる私の最高の願望の一つであった」[B, 12, S. 294]と晩年回想録で語っている。また、歴史家デピンク (Depping, G.) (1784-1853) もモンマルトルの丘に登り、その町の偉大さに打たれる [B, 21, S. 95]。1844年のドイツ人向けの新聞には、「フランスを他の国と比較するのは、人間を他の生き物と比較するようなものである。フランスはヨーロッパの光であり、学問、芸術の源泉である」(『ドイツ人の水先案内人』*Der Deutsche Steuermann*, Nr. 1. 1844) [B, 23]という記事が載る。ドイツのインテリたちにとってパリはかくも崇高なものだったのである。

いやドイツ人だけでなくロシア人にとってもそうであった。ゲルツェンは「パリは子供の頃からわれわれのエルサレム、革命の偉大なる都市であった。——ベルリン、ケルン、ブリュッセルは見るべき価値はあるのだが、それは通り過ぎるだけの都市にすぎない」[B, 69, p. 1099]と言っている。彼らが求めたものは、自由の祖国であった。フォルスター (Forster) は、こうした外国人を「誉めあげる外国人」(Étranger admirant)と呼んでいる。彼らは「パリは、死ぬ前に是非とも実現しなければならない幸福な夢の一つであり、パリを見ることこそ彼らの欲望であり、もし『俺はパリに行ったことがある』とさえ言えれば、いつ死んでも後悔はないであろう」と評している [B, 26, p. 422]。さらには、当のフランス人ですらパリそしてフランスの優越性を自負していた。ミシュレは「だが何と多くの人々が、自分の国よりもフランスで暮らすのを好んでいるとか！ 彼らはつながれていた糸を一瞬断ち切ることができるやいなや、哀れな渡り鳥として、ここフランスへ避難してくる。そして生命の熱気に満ちたいときを、得ようとするのである。彼らは暗黙のうちにここに普遍的祖国が

あるということを認めているのだ」[B, 59, p. 270]。

(1)
 パリに⁽¹⁾来たのは、自由の祖国を求めたインテリだけではない。手工業の盛んだったパリには多くの遍歴職人や徒弟が、ただ経済的な理由でのみでやってきた。さらにはもっと深刻な経済的理由から、ドイツから脱出を余儀なくされた単純労働者やパリに行けば何とかなると思ってやってきたルンペンプロレタリアートたちもいた。もちろん、下には下がいるとすれば、上には上がいて、ロスチャイルド(Rotschild)などの銀行家や大使、公使などの役人、アカデミー会員にまで登り詰める学者たちや音楽家たちが華やかなパリの社交会に華を添えるほどの集団をなしていた。こうした人々はいずれもパリでコロニーを作っていた長期滞在者であった。しかし、パリには短期滞在者も大勢いて、ル・アーヴルからアメリカへ向けて移民する途中パリに寄った貧しい人々から、パリ旅行を楽しむ豊かなブルジョアまで様々であった。⁽²⁾こうした玉石混交の状態こそがパリのドイツ人の姿である。しかしそのドイツ人を象徴しているのはけっして上流層の豊かさではない。むしろ当時の多くのドイツ人の境遇である貧困である。それは、ドイツの経済的、政治的貧困と相呼応して、パリのドイツ人たちに過激な思想をもたらす酵母となっていた。だからこそ、そこから生まれたのはドイツのハイ・ソサエティーの文化だけではなく、貧しい人々の声、社会主義、共産主義の思想でもあった。

本稿は、パリに住むドイツ人の人口を調査することによって、あたかも当時のドイツの矛盾をそのまま抱えこんだかのようなパリのドイツ人社会の実態にせまることを課題としている。それはたんにドイツ人の数の確定という人口学的問題に留まらず、ドイツ人コロニーのトポグラフィーを浮き彫りにする、非常⁽³⁾に広いパリのドイツ人の社会史的研究となっている。

(1) パリのドイツ人

a) 外国人とパリ

i) ドイツ人コロニー

東フランスのストラスブールやコルマル、ミュールーズには、数多くのド

イツ人が住んでいたが、人口という点ではパリはそれにまさるほどであった。パリに住む外国人の中でもとりわけ多いのがドイツ人であったからである。1851年の統計をみても [B, 100, p. 99], セーヌ県のドイツ人の人口は、13,584人で全外国人の22%を占めている。フランスにおいてパリ以外で1,000人を越えるドイツ人が住んでいる地域はアルザス、ロレーヌ、フランシュ・コンテしかない。ルーゲは、町を歩くと必ずどこからかドイツ語が聞こえてくるのに驚いている [B, 76, S. 321]。もちろんパリにはドイツ人以外にもベルギー人、イギリス人、ポーランド人、ロシア人、アメリカ人、イタリア人、スペイン人なども多く住んでいた。1851年の史料で言えば、人口でドイツ人に続くのはベルギー人、イタリア人、スイス人、イギリス人などであるが [B, 31, p. 279f], ドイツ人のコロニーは他の外国人と多くの点で違っていた。特に、ドイツ人固有の性格についての記述を見ると、その特徴がよく分かる。

クンツェ (Kuntze) は、ドイツ人とイギリス人を比較してこう言っている。「イギリス人は祖国を忘れることはなく、誇りをもってすべての国に接し、外国で学んだものを享受するために国に帰る」。しかし「ドイツ人はそうではない。ドイツ人は、その運命、祖国に不満で、新しい故郷を探している」 [B, 51, S. 261]。これはドイツ人が祖国に誇りをもたず、外国の文化へ同化しやすいということの意味している。それは、ドイツ人の中にフランス人に間違われることを良しとし、ドイツ人に間違われることを悪しとする、一種の屈折したコンプレックスとしても現れていた [B, 64, S. 60]。バンベルガー (Bamberger) は『パリ・ガイド』のドイツ人コロニーの中で、やはり、この対照的な民族をあげ、イギリス人は決して生活風習を変えないが、ドイツ人はたとえ外国の悪い習慣でもたちどころに慣れてしまう適応性を持っていると述べている [B, 69, p. 1018f]。これは個性の強いフランス人の前に出ると途端に馬脚を露わす。たとえばフランス語しか興味がないフランス人と、あらゆる言葉に興味をもつドイツ人という形で現れる [B, 69, p. 1019]。それは、上層、下層を問わずドイツ人に染み込んだフランス文化への屈辱的な態度であった。

それでは、ドイツ人はフランス語が上手で、ドイツ人同士固まらず、別個に

暮らしていたのであろうか。もちろんそういうものもいたであろう。華やかな社交会に出入りする上層階級などはそれであるし（しかし、彼らも地理的なコロニーはもっていなくとも、ドイツ人同士の階級的コロニーを持っていた）、帰化したドイツ人に見られるように同国の人に冷たい態度をとり、彼らとの接触を避けようとする人々などそれである。ハイネを訪問したマイスナー（Meisner, A.）（1822-84）は、ハイネの家を訪ねたが、一目瞭然にドイツ人とわかる服装をしていたために、最初は居留守を使われる [B, 55, S. 109]。これなどは、フランスかぶれというのではなく、ドイツ人の冷たい仕打ちへの嫌悪からなのであるが、やはりドイツ人の同国人への嫌悪の一つであろう。

しかし、実際にはドイツ人がいかに努力しようとも「フランス語の習得は日頃故郷で考えていた以上にむずかしい」 [B, 51, S. 270] ものであった。しかも、フランス人の話は省略が多く、早いし、フランス人は相手がフランス語をどれくらい理解するかでその人の能力を見るから、ドイツ人にとっては大変である。ドイツ人の民族的魅力などはまったく無で、ドイツ人とわかっただけでフランス人は興味を失うのだと厳しく言うものもいた [B, 51, S. 270]。「フランス人はパリ以外から来たものをすべて野蛮人と決めつける、あたかも古代のローマの人びとよく似ている」 (Nr. 3, 1844) [B, 23] という表現はそれをもっとはっきりと表現している。またパリでの経済的成功は百に一つであり、貧困の内に終わるのが関の山であるというのであるから [B, 51, S. 269]、ドイツ人はお互いに情報交換をし、フランス語を使わずして仕事にありつく方法を考えねばならないことになる。だから、フランスへの同化の早さという見栄は見栄として、やはりドイツ人のコネを探さねばならない。こうして、ドイツ人コロニーがパリで大きく発展していく⁽⁴⁾。

ドイツ人が群れをなすのにはいくつかの理由がある。まずコロニーの中心をなしている遍歴職人の場合である。彼らは、言葉はできずとも仕事を紹介してくれる宿⁽⁵⁾や、知人を求めてコロニーにやってくる。たとえば、ドイツ人が多く住んでいたフォーブル・サン・タントワヌ（Faubourg St. Antoine）には「ドイツ人の宿屋、食堂、ビアハウス、ワインハウスがあり、多くの者はたえず同

国人と付き合い、ドイツ人のもとで働き、住み、フランス語を覚えることもなく、故郷へ帰る際にも到着した時以上にフランス語をうまくならずには帰っていく」[B, 21, S. 94] といった状態であった。このようにフランス語をしゃべれなくともドイツ人社会だけで十分に生活できていた。だからこそ、それをコロニー (Gauen) と言うのである。職人のコロニーの場合、さまざまな職人が雑居して住んでいるコロニーとある職種のドイツ人が住むコロニーに分かれる。サン・タントワヌ地区などは後者であり、ヴィヴィエンヌ (Vivienne) 通り、リシュリユー (Richelieu) 通りは前者である。

次に、教会や互助組織を中心に集まるコロニーもある。ドイツ人を引き付けるとすれば、プロテスタント教徒はプロテスタント系の教会に、カトリック教徒はカトリック系の教会に引き付けられ、その近くに住むことになる。なぜなら、教会はやがて学校を創設し、ドイツ人の子弟はそこに通うことになったからである。また援助協会 (Hülfsverein)⁽⁶⁾ などのような互助組織、さらには医療機関を中心にドイツ人が集まる場合もある。特にドイツ人の医師はドイツ人を主として患者にする [B, 21, S. 100] のが普通であったから、ロンドンのようにドイツ人病院 [B, 74 参照]⁽⁷⁾ が創設されるほどではなくてもドイツ人を引き付ける魅力はもっていた。互助会には、教会系の互助組織もあった。

また、地理的条件で自然にできあがるコロニーもあった。馬車で来るものも、鉄道でくるものも、ル・アーヴル経由でセーヌ河下流から来ないかぎり、北か東から、具体的にはヴィレット (Villette) やベルヴィル (Belleville) などから入る場合多かった。したがって、北東にはドイツ人のコロニーが形成されやすかった。ちなみにドイツ人がやってきた通りである現在ジャン・ジョレス (Jean Jaurés) 通りはドイツ通り (Route d'Allemagne) と言われていた。鉄道が発展する前は、セーヌ左岸の貧しい地域サン・マルセル (Saint Marcel) などにドイツ人がいたが [B, 69, p. 1023]、鉄道とともに徐々にヴィレットからベルヴィルにかけての東側地域にドイツ人コロニーができる。さらにドイツ人コロニーは時代をおって、北へと広がり、サン・ドニ (Saint Denis)、クリニャンクール (Clignancourt)、サン・マルタン (Saint Martin) まで広がっていく。いずれにし

ても、地理的要因に支配されている。

こうした地理的要因に支配されない、比較的豊かな階層によるコロニーも存在した。大使館員などの高官、銀行家、商人などを中心としたドイツ人社会のソサエティーは、いくつかの高級な住宅地を中心に広がりをもって、そうした階層のドイツ人を引き付けた。こうしたソサエティーには、学者、芸術家、作家、知識人のコロニーも含まれる。マルクスやルーゲなどがパリのヴァノー（Vaneau）街で作っていたコロニーは地理的には狭い空間であるが、階層的には、ハイネ（ボワソニエール通り）やベルンシュタイン（パリ郊外）、ボルンシュテット（プロヴァンス通り）などを含む広い地域にまたがるコロニーを形成していた[B, 103 参照]。この種のコロニーの特徴は、ドイツ人にのみ開かれたものではなく、フランス人や、外国人にも開かれたものであったということである。しかし、階層的に閉じた空間であり、下層のドイツ人が容易に近付けない空間でもあった。ブレーシュは、この二つの階層について次のように語っている。「われわれが外国に住む同国人を考察の対象にしようとする時、前もって二つのグループを区別しておかねばならない。最初のグループは楽しみとして、あるいは一時的に学ぼうとやってくる階層で、次は一時的、長期的な生計の糧を与えるためにやってくる階層である。最初のグループではせいぜい個人が問題であるのに、後者では大部分は職人と商人からなる大衆が問題である」[B, 11] ルーゲはこうした労働者との付き合いを毛嫌いしているが、上層のコロニーの住民としては、それはごく自然であったことであろう。

ドイツ人コロニーの以上の状態であったが、こうした状態はなにもドイツ人にのみ限ったことではない。パリには多くの政治亡命者を抱えるポーランド人、スペイン人、イタリア人や主として労働者を多く抱えるベルギー人、フランスとの商取引やパリで悠々自適の生活をするアメリカ人やイギリス人がおり、彼らはそれぞれコロニーを作っていたからである。次にそれを見ていくことにする。

ii) ドイツ人以外のコロニー

パリの政治亡命者の中でとりわけ際だっているのがポーランド人である。人

数こそ他の外国人に比べて少ないものの、当時の社会に与えた点から見ると大きなものであった。亡命を願うポーランド人が目指した地は、フランス以外にもあったが、フランスの場合が4,000-8,000人で一番多かった（イギリス500-800人、ベルギー100人、スイス500人、アメリカ235人）[B, 41, S. 135]。実にポーランド人亡命者の5分の4がフランスに来ていたのである。すでに前稿で見たように、フランス政府は政治亡命者に対しては援助金を与え、手厚く保護をしていた[B, 100, p. 94-96]。そのためフランスに政治亡命者が集中するのは当然であったといえよう。

フランスのポーランド人対策は、いくつかの地域に収容所(Dépôts)を設けることによって行われた。1833年になくなるが、それは1833年4月の時点でブルジュ(Bourges)1,480人を筆頭として東フランスから中部、南部フランスにかけてポーランド人が収容された。パリの収容所は158人で比較的少なかった[B, 41, S. 136]。やがてパリのポーランド人の人数は増えていき、1841年で725人にまで増えていく。ポーランド人政治亡命者のコロニーはいくつかの点でドイツ人コロニーと異なっている。第一に、このコロニーの階層は主として軍人または貴族であること、第二に年齢が比較的低いということ、第三に独身者が多いということである[B, 41, S. 138]。第一の点は、蜂起の責任をとって亡命できたのは職業軍人か貴族であったということを意味している。第二、第三に関しては、そのなかでも若く、家族に未練がなかったものが亡命してきたことを意味している。⁽⁸⁾このコロニーはドイツ人コロニーの多くとちがって、知識人のコロニーであり、フランスやそのほかの外国人の知識人のグループとの密接な関係を持つことになる。⁽⁹⁾

多くのドイツ人コロニーにもっとも似ているのは、ベルギー人のコロニーである。彼らの多くはドイツ人と同じく政治亡命者ではなく出稼ぎの労働者である。ベルギー人は数の上でもドイツ人に匹敵する外国人であったし、職業においても競争関係にあった。ただし、ベルギー人(ワロン(Wallonen)人とフランドル(Flandern)人)のうちフランス語圏から来たものは表面的にはフランス社会にとけ込むことがはやく、コロニーを目だたせなかった。しかし、コロニーと

いうという点ではドイツ人と同じで、北から来るベルギー人もヴィレットやクリシー (Clichy)、バティニョール (Batignolles)、サン・タントワヌにコロニーを作っていく [B, 78, p. 246]。ヴィレット門にかけての通りは、ドイツ通りと同じくフランドル通りと呼ばれている。このコロニーの中心は職人や労働者であった。

ドイツ人コロニーとまったくことなつたコロニーとしてあげるべきコロニーはイギリス人やアメリカ人のコロニーである。アメリカやイギリスはパリに労働者を供給する基地ではなかった。彼らがパリで仕事を見つけるとすれば技術者か商人としてであり、労働者である場合は少なかった。イギリス人やアメリカ人を象徴するのは、むしろ経済成長の申し子としての観光客であった。特にイギリス人はパリの観光客の実に 60% から 70% を占めていた [B, 28, p. 243]。アメリカ人も負けてはいなかった。1830 年代には年数千人の観光客がパリに来ているのである [B, 28, p. 245]。アメリカ人の観光客の豪華さの例をとると、ドイツ人やベルギー人などの多くの労働者と比べてけた外れの豪華さであったことがわかる。旅行者といっても長期滞在者が多いわけであるが、彼らが滞在する家具付き高級アパートの例としてサン・ジェルマン (Saint Germain) のクーパー (Cooper) 氏の例は年 3,000 フラン、サン・トーギュスタン (Saint Augustin) のメイヨー (Mayo) 夫人の場合年 4,800 フラン [B, 53, p. 67] で、ドイツ人観光客に紹介されている平均的アパートの年 600 フランから 1,200 フラン [B, 47, S. 499] をかなりオーバーしている。こうしたところに住む人々は、先のコロニーの分類でいえば社交会のコロニーを形成していた人々である。当時のアメリカ人とイギリス人の贅沢を象徴したソーン (Thorn) 氏とホープ (Hope) 氏の場合、サン・ジェルマンの金満家の象徴でもあった [B, 53, pp. 112-116]。

このように三つのコロニーを比較すると当時のそれぞれの民族のおかれた立場が如実にわかる。ドイツ人の場合は、フランスにとってたんに肉体労働を提供するだけの民族にしか過ぎなかったのである。

b) 他国のドイツ人コロニー

パリのドイツ人コロニーが巨大であったことはすでに述べたが、当時ドイツ人コロニーはいたるところにあった。典型的なところだけでも、ブリュッセル、スイスのいくつかの都市、ロンドン、ニューヨークがそれである。それらのコロニーがいかなる状態であるかはまた別個のテーマになるので詳細には分析しないが、それぞれ密接な関係をもってつながっていた。まずそれらの都市が遍歴職人の遍歴コースとして、また政治的亡命先として、職業の提供先として、それぞれ時代とともにかわる中心点としてそれらの都市が存在した。とくにフォアメルツにあっては当初はスイスの都市チューリッヒやベルン、バーゼルなどがドイツ人を集め、やがて、パリ、ブリュッセルへと移っていく。それは職人や労働者の流れでもあり、また政治的亡命者の流れでもあった。フォアメルツ以後は、革命の影響を恐れたヨーロッパ大陸の政府によって労働者の移入や亡命者の移入が厳しく制限されることによって、中心はロンドンそしてニューヨークへと移っていく。

最初にドイツ人を多く集め、政治的急進主義の基地でもあったスイスの場合、ドイツ人のコロニーはかなり発展していた。ベッカー (Becker, A.) (1814-71) は 20,000 から 25,000 人 [B, 7, p. 3], ヴィヘルンは 20,000 人のドイツ人がスイスにいると言っているが [B, 93, S. 292], ビッケル (Bickel) の研究によると 1836/7 年の外国人の数は 56,344 人で、チューリッヒ、ベルン、バーゼル、ザンクト・ガーレン、ジュネーヴ、ノイエンプルク (ヌシャテル) などの都市に集中しているようである [B, 10, S. 167]。その割合をあげると 1836/37 年の統計でジュネーヴ 11,833 人、チューリッヒ 6,366 人、バーゼル 5,229 人、ベルン 5,203 人、ザンクト・ガーレン 3,355 人、ノイエンプルク 3,214 人となっている [B, 10, S. 168]。この中のドイツ人の数については、当時の史料では十分知ることはいえない。しかし、1860 年の史料にドイツ語圏の外国人の数があり、そのパーセンテージ 40% を単純にあてはめてもドイツ人のコロニーは、ベッカーの指摘のように 20,000 から 30,000 であったことがわかる。しかし、一つの都市に集中することはなかったと思われる。したがってスイスの都市のドイツ人コロニー

で10,000を越えるところではなかったと思われる。グランジョンの計算にしたがってこのうち2%が政治亡命者であるとする[*B*, 30, p. 87], 政治亡命者の数は400人から600人⁽¹⁰⁾はいたものと思われる。

ベルギーの状態も、その規模においてスイスとよく似ていた。クーランダは1842年のブリュッセルのドイツ人人口を10,000人、そのうち2/3が政治亡命者であると主張しているが[*B*, 30, p. 86], これはかなり誇張である。1846年の公式の統計を見るとドイツ国籍のものは1,588人(男917人, 女671人)にすぎない。しかし、統計というものは基準において変化するのでクーランダ(Kuranda)の主張を単純に誇張だといって否定できない。たとえば、出生地主義をとっている国の場合、子供は外国人でなくなるわけで、ベルギーの場合も出生地主義(jus soli)[*B*, 30, p. 93]であり、外国人の子弟の多くは外国人人口にはいっていなかったと思われる。ブリュッセルの場合もパリ同様拡大する都市圏にしたがって郊外人口が増えて行くが、ドイツ人の郊外の人口も数百人を数え、上昇していく[*B*, 78, S. 21]。ブリュッセル以外の都市を見ると、ドイツに近いということも含めてドイツ人の労働運動の拠点のひとつであったヴェルヴィエ(Verviers)が特徴的である。特にラインラントから多くのドイツ人がここに働きにきていたからである[*B*, 16, p. 718]。ケルン、アーヘンとブリュッセルを結ぶ要衝として重要な位置をしめることになる。このことは1846年の共産主義通信委員会において大きな力を持つことでもわかる。「この都市はドイツの共産主義運動を指揮している。とくにライン左岸、ケルン、トリーア、エルバーフェルト、デュッセルドルフ、アーヘンに関して」(16, mai, 1846)[*A*, 1, a]という報告はそれを示している。ベルギーでは、ドイツ人はたんに労働者としてではなく比較的多くの産業を支配していた。銀行、電気、鉄鋼、化学においてドイツ資本はベルギー経済に大きな役割を果たすことになる。ただブリュッセルをはじめ、ベルギーのどの都市もドイツ人を引きとどめるには十分ではなかった。ザルトリウス(Sartorius)の「ブリュッセルは多くのドイツ人にとってパリへ行く途中の中継地でしかなかった」[*B*, 78, p. 24]という表現を借りるまでもなく、ブリュッセルは雇用の数、政治的魅力などの点においてパリに遠く及ばな

表(1) 各都市のドイツ人コロニーの人口の類推（フランスを除く）

	1830—40年代
スイス	
チューリッヒ	2,000—3,000
ベルン	2,000—2,500
バーゼル	2,000—2,500
ザンクトガーレン	1,000—1,500
ジュネーブ	2,000—4,000
ヌシャテル	1,000—1,500
ベルギー	
ブリュッセル	2,000—3,000
リエージュ	1,500—2,000
アントワープ	1,400—2,000
ヴェルヴィエ	800—1,000
イギリス	
ロンドン	10,000人前後
マンチェスター	1,000—3,000
アメリカ※	
ニューヨーク	5,000—20,000

（※ニューヨークについてはあくまで誤差を多めにとってある。）

かった。

パリに匹敵する経済力と魅力を持った都市はイギリスのロンドンであった。ロンドンのドイツ人亡命者の活躍は、実は時期的には48年革命以後である。それ以前には、シャパーやヴァイトリンクのようにフランスから追われたものか、仕事の関係でイギリスに住まねばならなかったエンゲルスのような人々にとっての中心でしかなく、パリの後塵を拝していた。そのことはドイツ人人口の伸びでも明確にわかる。1851年のロンドンのドイツ人コロニーの人口は9,566人であるが、1861年にはその数は12,448人、1871年には19,773人、1881年には21,966人、1891年には26,920人と着実に伸びて行っている [B, 80, p. 805]⁽¹¹⁾（もっとも

ヴィヘルンは1840年代のドイツ人人口を25,000人から40,000人と言っている [B, 93, S. 300] が、この数字に信憑性はない）。これは、ヨーロッパ大陸の政治亡命者が、フランス政府からパリに住むことを禁じられ、自由なロンドンへ行かざるを得なくなるという条件にも左右されている。これはユゴー (Hugo) (1802-85) やブラン (Blanc, L.) (1811-82) などのフランス人にとっても同じ事で、フランスを追われたフランス人の政治亡命者たちも数多くロンドンに住みフランス人コロニーを形成していた。実に当時のフランス人コロニーはドイツ人コロニーの次に大きなコロニーで5,883人もいた。もちろん、イギリスはベルギー同様出生地主義であるため、ドイツ人やフランス人のロンドンで生まれた子供の数は入っていない。だから実際には大きなコロニーを形成していたとも思われる。

最後に、ニューヨークの状況を見てみよう。アメリカもドイツ人が急激に増

えて行くのは 1848 年革命以後である。ナーデル (Nadel) はドイツ以外でもっともドイツ人の数が多いのはニューヨークであると断定している。そればかりか、「アメリカのニューヨークはドイツ語をしゃべる世界の三番目の首都であった、1855 年から 1880 年にかけてニューヨーク以上に多くの人口を抱えるのはベルリンとウィーンだけであった」[B, 61, p. 1] と主張している。もちろん、これは 1848 年革命以後のことである。実際にどれくらいのドイツ人がいたのかを見ると、1850 年 56,140 人、1860 年 119,977 人、1870 年 153,938 人、1880 年 168,225 人で、ハンブルクやケルンとの人口比較に関してはナーデルの発言は微妙であるが、ニューヨークのコロニーは相当なものである。しかし、1830 年代、1840 年代となるとこのパリのドイツ人を凌いでいたかどうかはかなり疑問である。その理由は、1840 年代以前はドイツ人の移民はその後比べて格段にすくなかったからである。つまり 1849 年を境に突然大量のドイツ人移民が始まるのである。⁽¹²⁾

以上いくつかの主要なドイツ人コロニーを見てきたが、結果的にみてわかるように 1830 年代、40 年代において、パリほどドイツ人を集めたところはないということである。次にパリのドイツ人についてもう少し具体的に見てみることにする。

c) パリのドイツ人

i) ドイツ人に対するイメージ

パリのドイツ人は、当時のフランス人にとってどの様に見えていたのかということに興味深い問題である。それは、そうした偏見が、たとえそれをドイツ人が否定しようとも、当時のパリのドイツ人の状態をよく現していると思われるからである。

言われる側としては非常に屈辱的に感じられるのだが、言う側からするとそのようにしか見えないという現実が外国人労働者のイメージには深く付きまとっている。世界有数の金持ち国民になってしまったドイツ人が、トルコ人やユーゴスラヴィア人（現在のクロアチア人、セルビア人など）労働者をつかまえて、

その国名ではなしに、トルコ人を掃除夫、日雇い労働者などと呼び、ユーゴスラヴィア人を工場労働者などと呼ぶ場合にも、呼ばれる側の怒りとは別に、その時代のその国民の悲惨な状況を現している場合が多い。このように尊大な言葉を現在吐くにまでいたった成金国民ドイツ人も、1世紀前は彼らのトルコ人とたいして変わらない呼ばれ方をしていたことを知った時、怒るのであろうか、あるいは世の中の無情を感じるのでしょうか。

ドイツ人のイメージはまずその職業からきまってくる。職業には貴賤はないとしても、軽蔑の対象で見られる職種としては、フレジエ (Fregier) が危険な階級としてあげている [B, 27] プロレタリアート以下、職人以下の階級の職業である。さしづめルンペンと言うところであろうか。そうした職種をいくつかあげてみよう。当時のパリではトイレはくみ取り式で、地下にたまった肥溜からくみ取り人がくみ上げていったわけであるが [B, 96, p. 80], そうしたくみ取り (Vidange) においてドイツ人が活躍していた [B, 8, p. 136]。また紙屑屋 (Chiffonnier) や売春婦などにも多くのドイツ人がいた。売春婦に関しては、パラン・デュシャトレ (Parent-Duchatelet) の本がその数を教えてくれる。1831年の統計によるとフランス人以外のヨーロッパ人451名のなかでオーストリアを除くドイツ系の出身者は75名にのぼっている [B, 68, p. 40]。1845-54年の統計でも78名 [B, 68, p. 42] であり、かなりのドイツ系女性が売春婦をしていることがわかる。売春婦へ身を持ち崩す前の職業の多くは奉公人が多いが、この奉公人こそ多くのドイツ女性の仕事先であった。もっともギラル (Guiral, P.) とチュイリエ (Thuillier) によると部屋付き女中は売春婦とかわらなかったともいえるが [B, 40, p. 12]。奉公人に関しては現在ではユーゴ人の代名詞にもなっているホテルの掃除婦もあげられるが、これは当時ドイツ人やスイス人の代名詞のひとつであった [B, 88, p. 32]。またかなり大量のドイツ人 (200人) の特にヘッセン人 [B, 62, S. 10] が道路掃除人夫 (Strassenkehrer) をしていた [B, 86, S. 21]。もちろんこれらがドイツ人のすべての職種ではない。むしろ技術をもった仕事に従事しているものも多い。しかし、「ドイツもまた比較的多くのろくでなしをパリに送っている」 [B, 51, S. 275f] と述べられているように、非常に低い階層の

人々を送りだしていたことも間違いではない。

さらに、アメリカへの移民の途中、パリに立ちよるドイツ人の悲惨さはフランス人の眼のなかに鮮烈なイメージを残しているはずである。民衆に対して積極的に臨んだミシュレは、ある日のこと馬車に一切の家具と子供たちを載せてフランスへ向かうドイツ人の貧しい移民にあう。そして彼らの悲惨な未来について思いを馳せている。「フランスを去る前に、すべての方策はつきてしまう。息子は売られるであろうし、娘は下女になるだろう。小さい子供たちは近くの工場に通うようになるであろう。妻はブルジョアの家に乳母として雇われるか、あるいは自分の家で小商人や労働者の子供を預かるようになるであろう」[B, 59, p. 57]。この文面から移民のドイツ人の状況がわかる。いくにんかはアメリカへ行くこともなく、パリあたりで底辺の層へ組み込まれていったのである。ドイツ人の中にもこの状況を次のように表現しているものがいた。「アメリカへと旅たったのは農民たちであった。その馬車には古い簞笥や、ベッド、マット、椅子、戸棚などが積まれていた。木車輪のうえにつけられた大きな幌が全体を隠していた。幌の下では藁の塊に座っている子供と、白髪のすっかり痩せてしまった老婆が外を見ていた」(Eckmann/Chartain, *L'Ami Fritz*, 1864, S. 16) [B, 35, S. 87]。当時のドイツ人労働者たちもセーヌ河沿いの小屋に野営をしている移民たちのことを報告しているが、逆に自国民の悲惨を見ることによって、民族意識、階級意識が盛り上がってくるのだということを指摘している(*Deutsche Tribune*, 19, März, Nr. 69, Homburg, [B, 35, S. 88])。1844年にルイ・ユアール(Louis Huart)が、『パリの外国人』(*Les Étrangers à Paris*)という本を出版したが、そこにもドイツ人移民の姿が描かれている。「パリからストラスブールへの道を春か秋に旅をした者は、この長い旅で道すがら出会う浮浪者に心をしめつけられる、悲しくつらい気持ちを押さえることはできないであろう。……やせほそった貧弱な馬が引く馬車ではルアーヴルまでたどりつく力もないであろう」(*Vorwärts*, 22, Mai, 1844)。これを見ても当時のドイツ人がフランス人にとって浮浪者同然に見られていたことがわかる。

しかし、ドイツ人のイメージとして強力なのは、職人としてのイメージであ

ろう。18世紀にメルシエ (Mercier, L. S.) (1740-1814) は「フランスのドイツ人には庶民しかいない」[B, 58, Vol. XI, p. 46] と述べているが、そのイメージは職人である。ドイツ人の職人の数はいくつかの分野においては半分近くもしめるほどに多かった (特に仕立屋 (Schneider, Tailleur) は5分の2, 靴屋 (Schuster, Cordonnier) は3分の1, 家具職人 (Schreinerei, Ébeniste) は5分の1 [B, 87, a, p. 19])。たとえば、「あなたの仕立屋はドイツ人にちがいない」[B, 26, p. 439] という表現に現れているように仕立屋はドイツ人が多かった。また靴職人に関しても、すでに1798年にパリのドイツ人の靴屋を描いた『パリのドイツ人の靴屋』という劇が演じられるほどであった [B, 35, S. 90]。ドイツ人職人がそれほどまでに進出できた背景としてその勤勉さがあるであろう。「ドイツの職人は一般的にみて勤勉で、倹約家で粗食で、最少の支出で最大の結果をあげる」[B, 21, S. 93]。「だからこそドイツ人の職人はこの地に大量にやってきて当地の職人人口のかなりの部分を占めるようになっている」[B, 21, S. 94]。しかし、ドイツ人がここまで進出できた理由は、彼らの勤勉さだけではなかった。実際には、フランス人の仕事の密度のほうが、かなり高い [B, 51, p. 262] という説もあるからだ。ドイツ人がこうした競争に勝てるとすれば、フランス人より低い賃金で働くことだけである。シュヴァリエの「靴屋はドイツ人か、ロレーヌ人か、マシフ・サントラルの人々であり、彼らの給与は非常に低かった。——ドイツ人の仕立屋はフランス人よりも低い給与で働いた」[B, 14, p. 116] という表現はそれを示している。シュモラー (Schmoller) (1838-1917) は1846年におけるプロイセンとフランスの所得を1904年のマルクでフランス225マルク、プロセイン150マルク (イギリスは381マルク) [B, 83, S. 138] としているが、これからみても、ドイツ人がフランスですこしばかり安い賃金で働いても十分採算がとれたようである [B, 51, S. 262]。したがって、ドイツ人の職人は技術的な面よりももっぱら給与的な面でフランスで力をもってきたといえる。フランス人のドイツ人職人に対するイメージもそんなところが反映されていると思われる。

ドイツ人に対するイメージの中で、もっと知的な面での影響はなかったのだろうか。スタール (Staehl, Anne-Germaine) (1766-1817) 夫人の『ドイツにつ

いて』(*De l'Allemagne*, 1813) 以後、フランスでのドイツ熱はたかまったが、それはドイツへの大衆の関心というところにまで進んでいなかった。1840 年代は独仏の人々にとってオリエント問題に端を発したライン領土問題で緊張していたが、ドイツ人がそのためフランスの論調を気にし、フランスのことを勉強したのに対して、フランス側はかなり無関心であった [B, 102, p. 95]。こうしたことが、ドイツ人への無関心へとつながっていき、大衆レベルでドイツの労働者とフランスの労働者との敵対へと 1848 年革命以後は進んで行くのである。とはいっても、ロスチャイルドのような国王に匹敵する巨万の富の銀行家は、パリの華やかなショセ・ダントン (Chausée d'Antin) 通りの華やかな社交会で光を放っていたし [B, 53, p. 137f], オーストリア大使館で催されるアポニー家 (Apponyi) の宴会は、ドイツ人の華やかな印象を与えたことも確かである [B, 53, pp. 142-149]。特に圧巻は、音楽の分野であるマイヤビーア (Meyerbeer, G.) (1791-1864), リスト (Liszt, F.) (1811-86), オッフェンバッハ (Offenbach, C. J.) (1819-80) のパリでの活躍は当時のドイツ人の中では異色で、ドイツ人の汚名返上とまでいかなくとも士気を高めるのに大いに役立ったと思われる。

ii) パリのドイツ人

パリには、すでに述べたようにさまざまなドイツ人が住んでいた。そのなかから重要なドイツ人をあげ、パリにおけるドイツ人社会の実態を分析することにする。

a ドイツ人労働者、職人のコロニー

ドイツ人コロニーの中核をなすのは職人や労働者の層であるが、この層は労働運動を通じ政治亡命者や知識階級と関係する層である。パリでのドイツ人労働者の組織化は 1830 年代に始まる。こうした組織化についてはすでにわが国でもいくつかの研究がある⁽¹³⁾のでその内容には言及しないが、この組織化の中で出てくる追放者同盟、義人同盟、共産主義同盟などの組織は、コロニーのなかの非政治的組織と密接に関係しているので、その辺りを含めてひろくドイツ人コロニーの中で位置づけることにする。

ドイツからパリにやってきた人々を支えるものは、基本的には同国人の人間

関係だけである。しかし、病気をした場合の言葉による障害、失業したり、就職の斡旋をしたりする場合の組織の不足、子供の教育やみづからのフランス語の勉強等についての教育機関不足、ミサに行くための教会の不足、ドイツ語の新聞や本を読みたくても本屋や読書クラブの欠如などが、多くの労働者から語られるようになってくる。1830年代からふえ続けるドイツ人人口は、こうした不満に対して自らそうした機関を設立する前提条件を作りあげてもいた。そうしたなかで、ドイツ人コロニーのための組織が設立されてくる。しかし、ここで大きな影響を与えたのが、政治亡命者による祖国ドイツの統一運動と、出版の自由への運動である。最初の政治組織である1832年に創設された「ドイツ民族協会」(Deutsche Volksverein)が、ラインプファルツの「出版の自由支持のためのドイツ祖国協会」(Deutsche Vaterlandsverein zur Unterstützung der freien Presse)の支部として設立された経緯でわかるように、当時ドイツで盛り上がっていた出版の自由とドイツ統一がパリでの結社に大きな影響を与えることになる。⁽¹⁴⁾この組織が母体とした「合唱協会」(Gesangsverein)も、本国の自由を求める人々の声を反映した組織であった[B, 81, S. 14]。これらの組織は名称からもわかるようにドイツ人一般の社交を中心とした組織でもあった。その構成メンバーは商人、知識人や職人たちと広範であり、まだ政治結社としての色彩を強めてはいない。

「祖国協会」はヴィルトの『ドイツ・トリビューン』(*Deutsche Tribune*)を中心としてできた組織で、パリ支部を形成するにあたっては、ヴォルフム(Wolfrum, H.) (1812-34) カルグル(Kargl, J.), ライプハイマー(Leipheimer, W. L.) (1804-34)にその設立を委ねる。この三名とも職人であり、ジャーナリストのガルニエ(Garnier, J. H.) (1802-55)を入れて4名を中心としてスタートする。ここで注意しなければならないのは、この政治組織は西南ドイツの自由主義運動と関係していることである。当時彼らのフランスでの活動の中心はまだフェネダイの担当するストラスブールであった。特にカールスルーエ、ストラスブール、ツヴァイブリュッケン、パリのシンジケートが重要である。バーデンは、その運動である出版の自由と祖国と統一運動の一つの中心であった。1832

年はハンバッハ祭との関係でフランスとドイツとの間に関係ができたが、その重要なパイプがこの「ドイツ民族協会」であった。

1832年のハンバッハ祭にはフランスから多くの者が参加したが、その媒介をなしたのがこの協会であった。しかし、ハンバッハ祭の後それまでドイツ側にいたサフォエ (Savoje, H. K.) (1802-79)、ピストア (Pistor, F. L.) (1807-86)、シューラー (Schüler, F.) (1791-1873) などの知識人はストラスブールへと亡命していく [B, 56, S. 376]。そこで、すでにみたような [B, 100] ドイツ人の大きな政治的なコロニーができ、居酒屋レープヒューネル (Rebhünel) [B, 35, S. 92]、印刷屋シューラー (Schüler, G. L.)、ハインツ (Heinz)、シュミット (Schmidt)、レフランス (Levrans)、ジルバーマンなどを中心に政治活動が始まる [B, 56, S. 380]。ストラスブールが重要な地点となり得たのはドイツへの地理的な近さにある。印刷物のドイツへの輸送はきわめて慎重に組織されていた。「フランスとドイツの役人の手助けによって国境の不法な配布センターができあがった。これに関して、ダニエル・ピストアの父が重要な役割を演じた。宿駅長として彼は、国境の交通をコントロールしなければならなかった。彼は政治亡命者に国境を越えさせたり、彼がストラスブールを訪問した際に不法に雑誌をプファルツへもっていくためにこの地位を利用した」。また「サフォエの兄弟もまた亡命者の雑誌を運ぶのを手伝った。彼は、トリーアのワイン商人として仕事上のつながりを亡命者たちのために手配し、故郷の同士との彼らの手紙の交信をおこなった」 [B, 56, S. 380]。

しかし彼らもやがてパリへと進出することになるが、この進出が1840年代になってやってくるヘーゲル左派の人々の『独仏年誌』の構想を考える際の重要な前提を作り出すことになる。まずサフォエはルドリュ・ロラン (Ledru Rollin) (1807-74) の妻のドイツ語の家庭教師になり [B, 56, p. 382]、彼の編集していた『レフォルム』(Réforme) の編集委員の一人となる。この編集委員会のメンバーにはルイ・ブラン、エティエンヌ・アラゴ (Arago) (1803-92)、フロコン (Flocon, F.) (1800-66)、デュプラ (Duprat)、ラムネー (Lamennais, F.) (1792-1854) などがいた。ブランは『独仏年誌』について厳しい批判を書くことになる

し [B, 99][B, 102][B, 104], アラゴはフェネダイと親しい関係を結ぶし [B, 102], フロコンはブリュッセルからマルクスを呼び戻す際に力を出しているし, デュブラも『独仏年誌』の書評 [B, 102] [B, 104] を書き, ラムネーはドイツ人の結社に大きな思想的インパクトを与えた [B, 84, SS. 44-46]。このつながりはドイツ人とフランス人をつなぐコネクションを探るうえで大きなものである。ピストアもパリにやってきて, 『ル・モンド』(*Le Monde*) (1836-37) [B, 60] という新聞を発刊する。これは『独仏年誌』を先取りしたもので, ドイツ人とフランス人が協同参加する独仏の知的連合の新聞であった。そこで民族を越えたコスモポリタンな世界を構想していた。⁽¹⁵⁾『独仏年誌』と違ってフランス側からラムネーの参加が得られた [B, 35, S. 96]。このように西南ドイツの自由主義運動は, パリのドイツ人のひとつの方向をつくりあげることになった。それは, ルーゲやマルクスのような知識人のコロニーの一つの方向, 独仏の知的連合ということである ([B, 102] [B, 104] 参照)。

しかし, こうした方向とは別に「祖国協会」「ドイツ民族協会」などの指導者であった職人たちによる急進化が始まる。1833年に7月の記念式典で演説したヴォルフムが逮捕され, 徐々に彼らの関心はドイツの統一や出版の自由から労働者の社会的問題へと変わっていく。その結果 1833年秋に職人たちと知識人たちとのあいだに亀裂が生じることになる。それには秋に始まった仕立屋と靴屋のストライキが関係している。すでにみたようにこれらの職人の多くはドイツ人であり, すでにパリでは靴屋の組織 (*Réunion des cordonniers*) と仕立屋の組織 (*Société philanthropique des ouvriers des tailleurs*) が成立し [B, 95, pp. 88-96], しかもそれが「人権協会」(*Société des droits de l'homme*) に関係しており, 彼らの要求の多くは賃金, 労働日, 労使関係, 生活改善などの非常に社会的問題であった [B, 84, S. 40]。⁽¹⁶⁾こうした動きが, 知識人たちのドイツの自由と統一といった抽象的なテーゼと両立しないことはあきらかであった。当時そうした動きに関心をもっていたのは印刷工のムシャニ (*Muschani, U.*) (1806-62), ベニヤ職人マイヤー (*Meyer*), 石版師ベニッツ (*Benitz*), ピアノ調律師シュトレール (*Straehl*) [B, 86 参照], 仕立屋シューマハヤー (*Schumacher, J*) (1804-72?) であっ

た。こうして、「ドイツ民族協会」はもっとラディカルな秘密組織「追放者同盟」へと変わっていく。

「追放者同盟」は、1834年にフランス政府が政治結社を禁止したことから生じた秘密結社であった。これに参加したメンバーの中で理論的中心に立っただのはシュースターとフェネダイ (Venedey, J.) (1805-71) である。シュースターはパリで医学を学び、やがてパリの「ドイツ人医師協会」(Verein deutscher Aerzte in Paris) を設立する人物で [B, 35, S. 84], フェネダイはピストア以後にドイツとフランスとの架け橋となった人物で、ともに知識階級に属する。しかし、自由主義的知識人と違って貧困や平等原理に引かれた急進的知識人であり ([B, 102] [B, 104 参照]), その点において「ドイツ民族協会」の流れと逆行するものではなかった。『パリだより』(*Briefe aus Paris*) (1834) のベルネー (Börne) と同様、パリの職人たちの貧困問題に真剣に取り組んでいった。シーダーは二人の間にイデオロギー的な基本的な相違点はなかった [B, 81, S. 191] と言っているが、本稿の主旨からすれば二人が職人のコロニーに近付きえた最初のドイツ人として、また政治結社を離れてもフランスとの関係を保ち続けたドイツ人として同じであると言える。

しかし、「追放者同盟」も徐々に職人の比重がたかまり、知識人の人数が少なくなるにつれて (230人中176人が職人, 14人が知識人 [B, 46, S. 452]), 知識人の神通力も通じなくなってくる。職人のうちで名のある者をあげると、仕立屋のエンケ (Encke) (1812-?) (1814-?) 兄弟, ヴァイセンバッハ (Weissenbach, Ch.) (1809-?), 靴職人のシェーファー (Schäfer, C. L.) (1808-?), 家具師のホフマン (Hoffmann, C. F. C.) (1812-?), バウアー (Bauer, A. H.) (1812?-?) などで、ここでもドイツ人の多くを占める職種が中核を占めていた。そしてその崩壊が「義人同盟」の設立となって出てくる。こうして初期のパリのドイツ人の知識人は職人のもとから去っていく。再度そこに挑戦して行くのがヘーゲル左派の面々⁽¹⁷⁾である。

「義人同盟」には知識人の香がすくなかったが、それにもかかわらずそのなかで大きな指導力をもった人物がシャパー (Schapper, C.) (1812-70) である。彼

は、ブランキ (Blanqui, Louis-August) (1805-81) の季節社との関係でフランス政府から追放を受けることになる。それ以前にフランス政府から逮捕、あるいは追放されたヴォルフム、フェネダイなどの指導者と比べてみても、シャパーのパリに残された記録は多い。現在アルシーヴ・ナショナルに残されているドイツ人に関する記録の多くが、蜂起や、暗殺などに関係したものであるが、シャパーと季節社との関係はその中でももっとも重要なものである。⁽¹⁸⁾さらにその後ドイツ人コロニーに与えた影響という点でもこの事件は重要である。クンツェはこのシャパーのことを次のように語っている。「1839年5月半ばに起きた蜂起に参加したもののなかにバーデン大公国の住民が一人いた。彼は他の多くの同志と同様に警察に逮捕されフランスから追放された。国境へ連れて行かれ、そこで警察にどの地を選ぶかと聞かれたが、彼は『もちろんイギリス、あそこではいま不穏な空気があるから』と答えたという」[B, 51, S. 274]。ここに、政治運動に走るドイツ人は不穏な分子であるという恐れが現れている。しかもその例が季節社の蜂起であった。ここでシャパーを始めとするドイツ人に対するフランス側の監視史料を使って、フランスから見たドイツ人の政治運動について見てみよう。⁽¹⁹⁾

パリに関して言えば、1830年代の場合勃発的な暗殺などの監視史料や地方の結社に関する史料はあるものの、パリの結社に関する史料は少ない。むしろ地方の方に監視の史料が多くある[詳しくはB, 100]。パリでドイツ人のコロニーとその政治結社に特に関心をはらわれたのは季節社の蜂起に関してであり、まさにシャパーの時からであった。シャパーの活動は地方ではそれ以前から注目されていた。その理由は、フランクフルトの監視所襲撃 (Frankfurter Wachenturm) 未遂事件で当局から注目されていたからである。フランスやスイスへの政治亡命の波に関しては4段階に分けられる。第一がカールスバート決議 (1819年) 以後であり、第二が1830年7月革命以後起こったゲッチンゲン蜂起 (1831年) (シュースター、ラウシェンブラート、アーレンス (Ahrens, J. H.) (1808-74) など)、1832年のハンバッハ祭 (フェネダイなど)、1833年のフランクフルト監視所襲撃未遂事件、1834年のヘッセンでの蜂起 (ビュヒナー (Büchner, G.) (1813-

37) などによる大量のブルシェンシャフトメンバーの亡命で、シュルツ, W. も含まれ⁽²⁰⁾る), 第三がマルクスやルーゲのようなジャーナリストの亡命で、第四が1848年革命失敗による亡命である [B, 35, S. 83]。第二の波に関係した人々に対しては、フランスやスイスでの監視は厳しかった。シャパーは、1836年にナンシーに向かって出発したことなどが警察の記録に残っているし、フェネダイも1832年にストラスブールにいたことが記録に残っている [B, 100, p. 106]。

警察記録によると、1839年5月季節社の蜂起との関連で逮捕されたシャパーについて次のように報告されている。「彼は、数カ月前にパリで組織され、たえず当方の厳しい監視対象であるドイツ人デマゴグたちの結社のもっとも熱狂的な中心メンバーの一人であった」。「この結社の目的はライン地方の蜂起を挑発することであった。さる4月21日メンバーの一人ヴァイトリンクという名の人物が革命の宣言、人権宣言のドイツ語への翻訳を持ってパリを出発した」 [A, 1, f]。これがドイツの秘密結社について当局の興味を引いた最初のものであったと思われる。この結社が「義人同盟」をさすものかどうかははっきりしないが、シャパーとヴァイトリンクの名があることなどからその可能性が高い。ドイツ人の結社について本格的に警察の報告がなされるのは1842年に入ってからである。しかし、その報告は「パリで結成された秘密結社に関する史料ードイツ人追放者同盟」 [A, 1, b] で、十分なドイツ人の秘密結社の動きを掴めていないとはいいたい。なぜなら当時すでに「追放者同盟」は中心ではなく「義人同盟」であったからである。こうしたドイツ人コロニーの中心部に関係しない中で、たとえば1841年のケニス事件のヘルマン (Hermann) (なめし T.), クーン (Kuhn) (パン職人) [A, 3] や1843年の蜂起のフェリックス・ベッカー (Becker, P.-F.) (1800-54) (詩人) などが上がっているが、彼らは本流とは関係していない。本流との関係で言えば、1845年の『フォアヴェルツ』をめぐる事件でヘーゲル左派の面々、さらには「義人同盟」にまで捜査の手が及ぶ時である。すでに、職人、労働者へと近付いたマルクスと彼らとの間に距離をおいたルーゲとの間には断絶が起きていたが、フランス当局はそうしたことはまったく知らず、一括して彼らの主要メンバーを追放する。しかし、この時

もっとも厳しい処罰を受けたのはベルナイスや知識人で、「義人同盟」との関係で言えば職人にはほとんどその影響が出ていないのである [B, 99]。実はこれにはわけがある。すでにシャパーやヴァイトリンクはロンドンへ移り、パリの結社は弱体していたからである。しかし、一方でパリでは政治結社にかわるドイツ人のための組織が着実にできていき、ドイツ人の社会問題の解決が別の形で実現されつつあったのも確かである。

1840年代になると政治的結社とは別に純粋にドイツ人を援助する機関ができてくる。そのなかには、教会、援助教会、ドイツ人医師協会などがあった。パリのプロテスタント系ドイツ人たちに現在渡されているパンフレットをみると日曜のミサにはどこに行くべきかが書いてあり、そこに伝道の歴史が書かれている。

特にカトリックの国フランスで一番困るのがドイツ人でもプロテスタント系であり、彼らにとっての教会開設は悲願であった。そのためドイツ人のためのカトリック教会よりも早く設立されている。「パリのドイツ人のための福音伝道」(Evangelische Mission unter den Deutschen in Paris)のための委員会が設立され、ドイツ人のために伝道を行うことになる。すでに1809年にパリ市役所近くのビレット(Billetter)という教会で伝道は行われたがこれによってパリ全体に広がっていく。この伝道組織はやがてドイツ人学校をサン・マルセルに設立し、教育へ参加していく。1846年当時の新聞によれば「毎週日曜、祝日に、フォーブール・サン・タントワヌ126番の救貧院の教会で11時ドイツ語の歌と福音主義の説明をする特別のミサが行われている」(1846年Nr. 42, 11月16日) [B, 23]と書かれてあるので、必ずしもすべてビレットで行われたわけではないようである。しかも、スイスの福音派の教会がサン・トノレにあり、ドイツ系の人々がそこに集まっていた。教会の建設は1858年に19区のヒューゲル・キルヘ(Hügel Kirche)(現在のロシア正教会サン・セルジュ(Saint Serge)教会)が最初で、1894年にクリストゥス・キルヘ(Christus Kirche)が設立されることになる(パンフレット *Deutsche Ev. Kirche*) [B, 92]。ルター派の教会はパリ以外では、比較的ドイツ人の多いマルセーユ、ボルドー、ル・アーヴル、ランス、リ

ヨン、エペルネーにもできた [B, 35, S. 102]。ランスやエペルネーの場合綿工業や農業でのドイツ人や通過のために滞在するドイツ人もいたが、シャンパン醸造の経営者として多くのドイツ人がいたからである。ドイツ人はシャンパンが大量生産に変貌する 19 世紀のこの時期に大きな足跡を残していた。ヴェルレ (Werle)、マム (Mumm)、ドゥーツ (Deulz)、クリューグ (Krug)、エイドシック (Heidsieck)、レデレール (Roederer)、ピペール (Piper) などで知られる銘柄がドイツ系である [B, 35, S. 104]。それと同様にボルドーにもワインに関するドイツ人商人が大勢いた。ハンブルクの商人たちはボルドーワインに必要なコルク材をドイツやポーランドから運び、逆にボルドーワインを北の諸国に販売した。そのため彼らはボルドー近くでシャルترونとよばれる租界地を作るほどであった。勿論、それ以外の商人もドイツ人とオランダ人で 5 分の 1 を占めるほどであった [B, 35, S. 102]。マルセーユとル・アーヴル (ル・アーヴルでは毎年 3 万人のドイツ人がアメリカに向かっていたと言われている [B, 93, S. 291]⁽²¹⁾) はアメリカへの、アフリカへのドイツ人移民の出発地であり、リヨンはパリ、アルザス、ローレーヌを除くドイツ人労働者の町であった。

一方、カトリックはドイツ語による伝道という点ではやや遅れる。1837 年にすでにドイツ語による伝道が叫ばれてはいた [B, 92, S. 1]。しかし 1847 年にはドイツ人のための教会の設立がさげばれ、伝道はドイツ人教会の設立という方向で始まる。対象地域はドイツ人が多く住んでいたヴィレットにかけての北東地域ラファイエット (La Fayette) 通りに 1866 年教会が完成する。このヴィレットの学校は「丘の学校」(Hügelschule) と呼ばれた [B, 65, p. 672]。カトリックの教会も、学校を併設することによってドイツ人の教育をおこなう。さらに相互扶助の機関や貯蓄銀行 (Sparkasse) の役割をも担い、苦しむドイツ人の手助けをするようになる [B, 92, S. 7]。また病院の建設も 1860 年代に計画されるが普仏戦争のため実現することはなかった [B, 57, S. 362]。

援助という点では、すでに 1844 年にパリでドイツ人の貴族や金持ちなどの寄付によりボルンシュテット、ベルンシュタイン、ケーラー (Koehler) 男爵によって「ドイツ人救済協会」(Hülf-und Unterstützungsverein für nothliche

Deutsches) が設立される。この機関の目的は、貧しいドイツ人やオーストリア人へ衣服や食料を与え、質屋へはいった職人の道具を出し、失業者に労働を見つけたり、故郷へ帰るお金を工面したりする組織であった。マルクスやハイネなども15フランを拠出している。この組織はやがて協会の組織とつながって1914年まで続く [B, 99, p. 7⁽²²⁾]

また同種の組織で、ドイツ中央ビューローという組織があった (Bureau-Central-Germanique)。この組織と援助協会との関係はよくわからないが、組織の連絡先が新聞『ドイツ人の水先案内人』の住所 (サン・タントワヌ 87 番) になっていることから、深い関係があったものと思われる。この組織はフランスにいるドイツ人に情報と、職業斡旋、裁判の手続き、パスポートの手続きなどの方法を教える組織であった。またこの組織とよく似た名でベルンシュタインの「ドイツ向け出版、コミッションの中央ビューロー」 (Bureau central de commission et de publicité pour l'Allemagne) という組織があった。この組織はライヴァルの『フォアヴェルツ』のムーラン街 32 番にあった [B, 99, p. 5]。

1840 年代半ばにはパリでの政治運動のみならず新聞雑誌などの活動も低下する。1830 年代の過激な雑誌、新聞に変わって日常生活を中心に紹介する新聞がでてくる。『フォアヴェルツ』自体、本来は 6 月までの副題「芸術、経済、演劇、音楽、社交生活のパリのシグナル」が語るように日常の情報誌であった [B, 99, p. 5]。また 1846 年に出版された『ドイツ人のためのパリ新聞』 (*Deutsche Pariser Journal*) (1846) [A, 1, K] や当時援助協会と深く関係していた『ドイツ人の水先案内人』 (1844-46) も平凡な日常的な新聞であった。しかし、フランス政府によるとこの新聞はドイツ人労働者に受けるために政治の記事を掲載していることになっていた [A, 1, a] (2, Avril, 1846)。ドイツ人コロニーにとってはこの時代はきわめて政治色の少ない時期であったが、フランス政府はけっして彼らの動きを無視していたわけではない。

ギゾーは、すでにロンドンに中心を移した政治的結社のメンバーとブリュッセルへ追放されたマルクスなどのメンバーの動きを⁽²³⁾探る。報告は、ロンドンの状況、ブリュッセルの動向、パリでの状況について触れている。ロンドンの動

きについては、シャパーやヴァイトリンクの名前があがっている [A, 1, a] (10, Nov., 1845)。注目すべきはこのロンドンのメンバーとブリュッセルとの関係について、さらにはパリとの関係についてフランス政府がある程度確かな情報を得ているということである。「ヴァイトリンクはつい最近ブリュッセルで——文学者ヘス、同志、何人かの外国の社会主義作家とともにドイツやベルギーの雑誌への通信局と一緒にいる出版社を創設した」 [A, 1, a] (17, Fev., 1846)。これは、共産主義通信委員会 (Kommunistisches Korrespondenz-Komitee) のことであろう。そこでヴァイトリンク、ベッカー、マルクスが本を出版する予定であり、特にマルクスの本のタイトルの予定は『社会的視点からみたフランス国民公会の使命』 (*La Mission de la convention française sous le point de vue social*) となっている。しかし、実際にこの本はでることはなかった。フランス当局はこの委員会の本部の住所がヘスの住むアリアンス (Alliance) 通り 3 番であることも突き止めている (マルクスはアリアンス通り 5 番に住んでいた)。特にフランス当局が注意していたのは、この委員会の国際的つながりであった。ドイツ人だけをとってみても、パリ、スイス、ニューヨーク、ドイツへとその通信網が広がっていたことを調査しているし、その中に、ベルギー人、フランス人、イギリス人、スウェーデン人なども入っていることにも神経を尖らせていた。

ヴァイトリンクのことにに関してであるが、当時フランスの警察にとって彼の名は有名なものであったと思われる。ギゾーの報告でも、ヴァイトリンクが中心になってブリュッセルで委員会を組織したとも見られているし、彼の著作に関してもその流布に警戒を促している。『一人の貧しき罪人の福音書』 (*Das Evangelium eines armen Sünders*) という本はパリのドイツ人共産主義者が多く予約しており、フランスへ入る際に *Economie rurale* というカヴァーを付け、表をみても分からないようになっているので十分注意することという指示を出している [A, 1, a] (6, mai, 1846)。また、各地の県の警察に配布されたヴァイトリンクがフランスへ入るかもしれないという情報 [B, 100, p. 109, p. 114] などは彼の動きに当局が関心をもっていたことを示している。

フランス政府はブリュッセルの共産主義者たちの権力闘争についても知って

いた。「ブリュッセルのドイツ人委員会の二人の指導者、マルクスとヘスは別かれてしまった」[A, 1, a] (16, mai, 1846)。そして、「数カ月以来揺れ動いてきたブリュッセルのドイツ人共産主義委員会は、もはや存在していない。しかしそのメンバーの多くはパリで再組織化する意図を持っている」[a, 1, a] (13, août, 1846) と判断し、パリでの再組織化を恐れている。実際には共産主義委員会から、共産主義者同盟へ変化して存続していたのであるが、フランス当局は彼らの何人かがやってきたことに関心があった。そのなかにヘスとエンゲルスがいたことも察知している。

ドイツでの社会主義者の活動については、ルーゲやヘルヴェークの動きを捉えている。彼らは社会主義者ではなく、むしろ急進主義者といった方がいいのであるが当局からすると同じであったのであろう。1845年7月ハイデルベルクで開かれたフォイエールバッハやフォーレン、ヘルヴェークなどの参加した会議について [A, 1, a] (21, juillet, 1845), また 1846年7月の同じハイデルベルクで開かれたルーゲ、バクーニン、ヘルヴェークなどの参加した会議について報告がなされている [A, 1, a] (17, août, 1846)。

1840年代のパリのコロニーでさまざまな労働運動の温床となったのはドイツ人の経営する居酒屋 (Taverne, Kneipe) やカフェである。⁽²⁴⁾ パリにもドイツ人の経営する居酒屋やカフェがいくつかあった (また多くのドイツ人の居酒屋でのビール需要に答えるためにドイツ人のためのビール醸造所もバスティーユ広場の近くに存在した)。次の報告を見ると、その名前がわかる。「ドイツ人の共産主義者が集まる主要な場所は、ボン・ザンファン (Bons Enfants) 通り 20 番の居酒屋シェルツァー (Scherzer) (1807-79) 月曜、木曜、土曜、日曜に音楽の夕べを催していた ラーブル・セック (L'Arbre sec), 通り 46 番のカフェガイサー (Gaisser) (この番地で当時ドイツ人の必携の書であった Strauss の『独仏辞典』が出版されている), ピエール・アムロ (Pierre Amelot) 通りの 8 番ホテル・シーファー (Schiever), ピエール・レスコール (Pierre L'Escor) 通り 22 番のシュライバー (Schreiber), コメット (Comète) 通り 7 番ホテルコメット⁽²⁵⁾ である」。そのほか、1830年代始めに「ドイツ祖国協会」などの会議が開かれた旅館を兼務しているティルシャップ

(Tirechappe) 通りのクレーガー (Kroeger), アンフェール (Enfer) 通り 9 番のクーン (Kuhn), ルヴォア (Louvois) 通り 8 番のカフェ・ドイッチェ [B, 28, p. 180]⁽²⁶⁾, コキリエール (Coquilliere) 通り 36 番のカフェ・ド・フランクフルト, ボンザンファン 14 番のフックス (Fuchs), パサージュ・デ・パノラマ 32 番のマヌーニ・エ・クリシュ (Manouny et Krich), イタリア通り 2 番のミュルーズ, 同じく 20 番のヘルダー (Herder) [B, 23] などもあった。クレーガー自身協会の中心人物であった。主人が労働運動の中心人物であった居酒屋にシュルツァーの店がある。彼はもともと靴職人としてパリにやってきた人物で, 1840 年代「義人同盟」のメンバーとなり, 1852 年パリで蜂起事件を起こし逮捕されている。そのとき逮捕されたドイツ人は彼を含め 5 人で懲役 3 年の判決を受けている [A, 1, d]。

こうしたドイツ人の形成するカフェや居酒屋でなくとも, ドイツ人が多くあつまるカフェ, 居酒屋もあった。たとえば, マルクスとエンゲルスが会ったとされるリシュリユー通りのカフェ・ド・ラ・レジャンス (Régence), またパレ・ロワイヤルの中にあつたカフェ・フォア (Cafe Foy), カフェ・ヴェリ (Very) である [B, 35, S. 96]。この地域は『フォアヴェルツ』の編集部やドイツ人が多くいたヴィヴィエンヌ (Vivienne) 通りとも近く, ドイツ人にとって都合のよい場所であつた。ドイツ人用のレストランとしては, オートフィーユ (Hautefeuille) 通り 26 番アルザス料理のレストラン, ブラズリ・アルザス, ヴィクトワール広場のユンクブルート (Jungbluth) [B, 23] などがあつたが, 特に後者のディナーは 1 フランを越すもので, 庶民向けのものではない。

居酒屋と並んで労働運動にとって重要なものは, ドイツ語の活字を組んでくれるドイツ人の印刷屋である。『フォアヴェルツ』などはフランス人の印刷所に頼んでいるが, 秘密を要するようなビラの類は気心の知れたドイツ人の印刷所かドイツ人の印刷工に頼んだ方が安心であつた (『追放者』はリシュリユー通りのフィエヴェクの所で印刷している)。ドイツ人の印刷工は仕立屋や靴屋程ではなかったがある程度はいたため, そうした所で夜こっそりと印刷したりもした。またパリにはドイツ人の出版物を取り扱った印刷屋が何軒かあつた。『独仏年

誌』を印刷したピガール通り46番のヴォルムス(Worms)やシェルツァーの居酒屋の通りボンザンファンにある「独仏印刷、出版所」というドイツ人のシェルフ(Scherf)の経営する印刷所がそれである[B, 35, S. 92]。特にドイツ人の印刷所として著名なのはエリアス・シラー(Elias Schiller)である[B, 35, S. 93]。彼はやがて官報を印刷するまでに成功する。また出版者をみると、ハイネの本を出版したりしたフィュー・サン・トマ(Filles St. Thomas)通り14番のハイデロフ(Heideloff)がある(*Vorwärts*の宣伝)。ここはハイネやベルネーなどの知識人と出会う場所であった。また楽譜の出版者としてシュレジンガー(Schlesinger, M.) (1798-1871)の名をあげることができよう。1830年代から*Gazette musicale*を発刊し、パリでも有数の音楽出版者となる[B, 35, S. 111]。

印刷屋と並んで重要なものはドイツ語の書籍を扱う本屋である。たとえば1840年代にはトゥールノン(Tournon)通りの6番ジュール・レヌアール(Renouard), クリンクジェック(Klincsieck) (1813-74) (ドイツ人の出版者のいく人かがここで修行をしていた[B, 4, S. 312]) やリシュリュ通り67番(現在65番)のフィエヴェク(Vieweg, F.) (1813-74), リール通り11番のウィルヘルム・ヴァイス(Wilhelm Weiss) [B, 4, S. 243], 69番(現在の67番)のブロックハウス(Brockhaus), モンモランシー街16番のシュミット(Schmidt), ヴィヴィエンス通り⁽²⁷⁾の本屋, 1830年代には先のハイデロフなどがある[B, 35, S. 96]。フィエヴェクは1845年に『フォアヴェルツ』に関係してフランスからの追放命令を受けている[B, 99, p. 21]。こうした本屋は、パリで出版されたものも取り扱っていた。

しかし、多くのドイツ人は本や新聞を買うだけのお金はないのでこういう場所よりも、むしろ読書クラブを利用した可能性⁽²⁸⁾が高い。マイスナーは、次のように語っている。「サークル・ヴァロワ(Vallois)と呼ばれる読書クラブはパレロワイヤル、つまりパリのまん中の最高に位置するところにあった。大きなまん中の机のうえに50ばかりのフランス語の新聞、外国語の新聞がおかれてあった」[B, 55, S. 114]と述べているが、ドイツ語の新聞があった可能性は高い。このクラブはおもにドイツへ記事を送るドイツ人が利用したクラブで、近くの

証券取引所の郵便局をつかって記事を送っていたようである。実はエンゲルスもこのクラブを利用している（「エンゲルスからマルクスへの手紙」(19, August, 1846, MEW. Bd. 27, S. 32) の住所)。同種のクラブでドイツ人に利用されたと思われるのはパレ・ロワイヤルのモンパンジエ (Montpensier), ゲネゴー通り (Guenegaud) 5 番のコジビュール (Kosibuehl) などであった。しかし、このような立派な読書クラブは、労働者が気楽に新聞を読めるような雰囲気ではない。むしろ客の中心はジャーナリストなどの知識人であったと思われる。街角のつつましやかな小さな読書クラブに行くのが普通であったと思われる。その中で、ドイツ人が通ったであろうクラブはドイツ人が経営するデッカー (Dekker) (1821-?), シュレーダー (Schröder) (1822-?), ザイラー (Seyler) (1824-?), シュタウプ (Staub) (1827-?), アマリエ・アフェリン (Amalie Averin) (1829-?), デルシュック (Doerschuck) (1838-?) [B, 86, S. 33] であった。また居酒屋にも 2, 3 の新聞はあったし、ベルンシュタインの開いた貸本屋やパサージュ・ド・ソーモン (Saumon) 14 番のドゥルーハヤの貸本屋にでも行ったことであろう。このベルンシュタインという人物は企業家的才能にあふれ、フランス語の記事を送ったり、ドイツ語の記事を送るアヴァスのような通信社を作ったり、『フォアヴェルツ』を出したり、1844 年のパリ博覧会のためにムーラン通り 32 番で旅行業者のようなことまでやっているが、通信社は結局レーヴェンフェルス (Loewenfels, M. W.) に買われ、カッセル出身のロイター (Reuter) (1816-99) のパリでの台頭によってドイツ人の通信者第一号の名もあぶなくなってしまう [B, 86, S. 32]。

b ドイツ人上層のコロニー

職人や労働者の一団を離れてもっと上層を見ると、直接彼らのコロニーと離れたところに学者、建築家、芸術家、音楽家などのコロニーがあることがわかる。そのコロニーを次に見ることにする。まずこうしたコロニーの全体像をつかむには、援助協会の寄付の名簿を見ると良いと思われる。援助協会を支えた新聞『ドイツ人の水先案内人』に、1844 年と 1845 年の 2 年に渡って寄付リストが掲載されている（『フォアヴェルツ』にも一部掲載されていた）。寄付の額は必ずし

も一定ではないが、1844年の4月25日のヌーヴ・プチ・シャン49番で開かれた総会でのリストでは、1年間の寄付の額が出ていて、もっとも少ないもので5フラン、もっとも高いもので500フランである。平均すると大体10-20フランというところである。しかし、こうした寄付に10フランを出す人々はかなり裕福な人々と考えて良いであろう。この名簿に掲載されている人数は300人少々であり、パリのドイツ人の一部に過ぎないが、しかし当時のパリのドイツ人の中のもっとも重要な上層階級であったことは確かである。そこには大使、伯爵、銀行家、ジャーナリスト、芸術家、学者、出版者など主要なメンバーが含まれているからだ。そこでABC順に主要な人物を拾ってみることにする。以下の人物がそれである (No. 34, 1845年9月21日 [B, 23])。

パリで派手なパーティーを催し名を高めたアポーニーオーストリア大使 (180fr)、マルクス等の追放を画策したとされるプロイセン大使アルニム公 (200fr)、歴史家のデピンク (15fr)、250フランを寄付したケルンのライヒマン (Reichmann)、ヘッセン＝ダルムシュタットのドラッヘンフェルス (Drachenfels) 男爵 (100fr)、古典学者デュプナー (25fr)、詩人ハイネ (15fr)、建築家のヒトルフ (10fr)、カフェのフックス (10fr)、ホフェントカル公 (109fr)、本屋のクリンジック (25fr)、コルプ (10fr)、音楽家フランツ・リスト (200fr)、カール・マルクス (15fr)、学者のマルクス (Marcus) (10fr)、同じく学者のモール (20fr)、フランスのオルレアン公 (500fr)、フランス国籍をとったモイラー (15fr)、音楽家のマイヤビーア (70fr)、メクレンブルク公 (300fr)、本屋のレヌアール (25fr)、銀行家ジェームズ・ロスチャイルト (300fr)、ザロモン・ロスチャイルト (300fr)、サフォーエ (20fr)、医者 of ジッヘル (20fr)、印刷屋のシラー (10fr)、本屋のヴァイス (15fr)、本屋のフィエヴェク (15fr)

もちろんこの他に、発起人のボルンシュテット、ベルンシュタイン、ケーラー、レルミニエなど数十名がいた。以上の名を見て言えることは、いずれも

10フラン以上の寄付ができる余裕のある階級ということである。この中に、『独仏年誌』のルーゲや詩人のフライリヒラートの名がないのは意外な感じであるが、おそらくそれはすでに4月の段階でルーゲがマルクスたちの動きから離れていたことを意味するのであろう。1845年度の総会では、寄付者は200名に減少している。しかし、この名簿には職業が掲載されており、ドイツ人コロニー上層の職業を分析することができる(1845年4月17日の総会, 1846年No. 16, 1846年4月19日)。それによると、伯爵、公爵などの貴族、大使、公使、医者、学者、出版者、銀行家(この年度にはケニヒスヴァルターの名が掲載されている)、芸術家、商人、宝石商、薬屋、金利生活者、牧師などである。特に多いのが商人と学者である。ドイツ人がパリで成功できた分野はランスやボルドー同様商人と学者である。ドイツ人がパリで成功できた分野はランスやボルドー同様商人と学者であり、また研究者であったことを意味している。この名簿に職人の名を見つけることは不可能である。このことは、そもそもこの組織が下層のドイツ人を援助するための上層の人々の組織であったことから当然であるのだが、しかし、上層と下層との間の断絶も明確であったことも意味している。次に、当時パリで名を馳せたドイツ人を拾って見ることにする。

まずパリで名を高めた学者を拾ってみると、古典学者のデュブナー(Dübner, F.)(1802-67)、フランスのアカデミー会員にまで登り詰めたヴァイル(Weil, H.)(1818-1909)オリエンタリストのハーゼ(Hase, K. B.)(1780-1864)、モール(Mohl, J.)(1800-76)、コレージュ・ド・フランスの教授オッペルト(Oppert, J.)(1825-1905)、マルクス(Markus, L.)(1798-1843)、ムンク(Munk, S.)(1803-67)、ヘブラリストのデーレンブルク(Derenburg, J.)(1811-95)、経済学者のブロック(Block, M.)(1816-1901)などがいた[B, 35, S. 84]。たとえばハーゼは、王立図書館を皮切に、ギリシア語、ペルシア語の古文書学者としての地位を確立し『ジュルナル・デ・サヴァン』(*Journal des Savants*)の編集にもたずさわる。ユリウスは、『アウクスブルク・アルゲマイネ』の通信員にもなっている[B, 35, S. 113]。また、その他、パリに留学した学生、短期滞在した著名な学者もいる。学生に関しては、デピンクの表現を借りるならばあまり評判のいいものではない。ドイツで勉学不十分で退学処分になったものがパリに目を向ける場合が多

かったようである（ドイツの留学生の数は少ない。比較的多かった医学部への留学生も1840年代には激減する Caron, J. C. *Généralités romantiques, les étudiants de Paris & le quartier Latin (1814-1851)*, Paris, 1991, p. 68）。しかし、彼らの幻想はやがて悲惨な結果と後悔にかわるであろうと予告している [B, 21, S. 92]。短期に滞在した学者の中で、その行動がフランス政府の注目を引いたのは1840年代にあってアレキサンダー・フンボルト (Humboldt, A.) (1769-1859) ぐらいであろう。彼の場合、学者としての名声のみならず、プロイセンの使命を受けて外交使節のような役割をもった可能性も大きく、警察では彼のパリへの入市、出市を記録していた。フンボルトが1845年にマルクス等がフランスから追放されたことに関係したのではないかという疑問は何度か問題になったことであるが [B, 99, p. 21f], 確かにフンボルトは1845年の1月にパリにやってきたことが警察史料で分かる。これによると、フンボルトがやって来たのは従来言われていた1月4日ではなく、1月6日になっている。ビールマンによるとその1月7日にルイ・フィリップに会っているということなのであるが、マルクスなどのような名のない人物のことを早速にお願いするようなことをとてもできるようなタイミングではない。実際の内容はわからないが、フンボルトが来ていたことはこの史料からわかる。この史料に記載されているのは大使、公使クラスを除けば極めて著名であったと思われる人物だけで、フンボルト以外には音楽家のマイヤビーアだけである [A, 1, h]。フンボルトの問題はそれとして、パリにいた他のドイツ人の学者たちをみても、彼らがドイツ人の労働者や急進的な知識人と関係をもつことはきわめてまれだったと思われる。

医者の方では、シュースターのように積極的にドイツ人の労働者の社会に入っていくものもいた。また町医者としてはマルティール (Martyrs) 通り 47 番のキューンツリ (Künzli) とサンポール (Saint Paul) 通り 15 番のブラヴァツキー (Brawatzki) が有名であった [B, 23]。しかし、医学者としてアカデミックな中で研究を進めていた人々などは、労働者のコロニーとはほとんど関係していない。細菌学の創始者の一人グルービ (Gruby, D) (1810-98) (正確にはヴォィヴォディナのノヴィサドの出身)、彼とともに眼科学を発展させ、フランスで司書の眼

科医となったユリウス・ジッヘル (Sichel, J.) (1802-68), ホメオパシーの創始者ハーネマン (Hahnemann) (1755-1843), パリ市の衛生問題で活躍したメディンク (Meding, H.) (1822-65), 催眠療法のコレフ⁽²⁹⁾ (Koreff, D. F.) (1783-1851) (彼のパリのサロンにはハイネ, マイヤビーア, クーザンなどが集まった) など多彩であった [B, 35, SS. 105ff]。これらの医師の多くがユダヤ人であったことは興味深い。パリにはとりわけ多くのドイツ系ユダヤ人がいたからである。「パリは今日のユダヤ人にとってカナンの地に等しい。ここでユダヤ人は活躍のゆとりある大きな空間を見つけている」 [B, 51, S. 275] という表現にあるように, ドイツ系ユダヤ人はパリで力をもっていた。またドイツ人の通った歯科医には, ルベック (Rubeck) とロジュ (Rogers) がおり, 薬屋にはショセ・ダンタン 51 番のホフマン (Hoffmann) がいた [B, 23]。

そのユダヤ人を代表するのは商人や銀行家たちである。その代表格はパリロスチャイルド家の創始者ショセ・ダンタンに住むマイヤー・アムシェル (ジェームズ男爵) (Meyer Amschel) (1792-1868) である。1847 年の『ドイツ・ブリュッセル新聞』に掲載された「東洋から来た救世主」という表題のカリカチュアは, ユダヤ人の前に跪く 7 月王制をからかっているが, それほどの力をロスチャイルド家は持っていた。フランクフルト出身のロイスチャイルド以外でもフルトから来たマクシミリアン・ケニヒスヴァルター (Koenigswarter) (1815-70) はパリで銀行家として大きな力を振っていた [B, 35, S. 107f]。

こうしたブルジョアの援助を受けることになるのが, 芸術家たちであるが, 音楽の場合, 先にあげた著名な人々以外にも, ショパンの作品を手掛けたりシュリユー通りの 97 番 (現在の 87 番) シュレジンガー [B, 35, S. 86] の出版者に出入りしていたヘラー (Heller, S.) (1813-88), エルンスト (Ernst, W.) (1814-65), リヒハルト・ワグナー (Wagner, R.), ドライショック (Dreyschock, A.) (1818-69), ヘルツ (Herz, H.) (1806-88), カルクブレナー (Kalkbrenner) (1785-1869) [B, 35, S. 111] などもあった。又, ピアニストのタールベルク (Thalberg), ヴォルフ (Wolff), ローゼンハイム (Rosenheim) も忘れてはならない (Vorwärts, 29, mai 1844)。特に労働者との関係で言えば, トリーア出身のマインツァー (Mainzer, J.)

(1801-51) が重要である [B, 37]。彼は音楽を民衆の中に入れようと努力する。音楽家としての成功はほとんどないが、ラムネーのグループとの関係や労働者との関係で貢献をする。⁽³⁰⁾ その他音楽に関してはドイツ人に音楽を教える音楽家もいた。ルーティゲン (Lutigen) はコンセルヴァトアールの会員でマルティール通り 40 番で歌唱を教えていた (*Vorwärts*, 17, Januar 1844)。

芸術の分野では建築家ヒトルフ (Hittorff, J. I.) (1792—1867) が注目に値するであろう。それは、まず北から鉄道で入るドイツ人が最初にパリでみる建物は彼の作品だからである。北鉄道を経営していたのもロスチャイルドであったが、ヒトルフはパリの鉄道最大の北駅を設計することになった。そのほか、19世紀前半まで庭園風で、交通を阻害していたコンコルド広場を現在のスタイルにしたのも彼である。実は、彼はドイツ人の労働者とは深い関係がある。彼については次のように言われているからである。「ヒトルフは死ぬまでドイツの故郷へ大きなつながりをもっていた。彼はパリへやってくるドイツの同郷人をみんなわけ隔てなくあたたかくもてなした。そして、出身にかかわらずたえずドイツ人労働者たちを自分の工場現場で働かした」[B, 42, S. 220]。彼が設計したコンコルド広場やシャンゼリゼの改修には多くのドイツ人が使われていたのである。しかし、彼はもちろんこれによって非難を受けてもいた。そのほか 1849 年のドレスデンでの蜂起でバリケードを指導し、後にロンドンで有名な建築家となるゼンパー (Semper, G.) もしばらく潜んでいたことがある [B, 43]。

このようにフォアメルツのパリのドイツ人たちは、職人や労働者として消えていく人々や、そこで生まれる労働運動に参加することによって後に名をのこす人々から、すでに当時において確固たる地位をもちフランスの政界、経済界、文化界に大きな影響力を与えてきた人々にいたるまで、さまざまな形で深くパリと関係していた。おそらくパリの社会史から彼らドイツ人をはずすとすると、きわめて味気のないものになってしまうであろう。たとえば当時の舞踏会でのドイツ人の活躍は大変なものであった。『フォアヴェルツ』は「ドイツ人がいなければ舞踏会の半分が失われるであろう。なぜならドイツ人だけがうまく

踊れるからだ」と言っている (3, Juni. 1844)。

(以下 (下) に続く) (引用文献, 注に関しては (下) に掲載)